

日本再生のヒントは自衛隊教育にあり

麗澤大学特別教授 元空将 織田邦男

日本経済が絶頂期にあった 1990 年前後だったと思う。「日本は爛熟して倒れつつある」と誰かが言った。バブルに浮かれていた当時、不安は感じたもののあまり気にはかけなかった。だが最近、この言葉がやたら真実味を帯びているように思えてならない。

いじめ、自殺、パパ活、教師の盗撮、無気力、闇バイト、ストーカー殺人、親子虐待、裏金・・・いやな言葉が連日のようにメディアを賑わす。最近は選挙に大敗しても、党首は潔く責任をとらなくなつた。日本人は恥の文化を誇りとし、道義や品格を重んじた。こんな日本が今、静かに倒れつつある。

国の衰亡は、敗戦や破綻ではなく、「緩慢な死」が多いと言われる。ベニスの歴史家ジョバンニ・ホテロは「偉大な国家を滅ぼすものは、決して外面向的な要因ではない。何よりも人間の心の中、そしてその反映した社会の風潮によって滅びる」と言った。

筆者が某大学で「リスクマネジメント」を教えていた時のことである。「自分の人生のリスクマネジメント計画を策定せよ」という課題を出したことがある。自分の夢実現に立ちはだかるリスクを想定し、これを回避する計画を立てさせるものであった。先ず人生の夢や目標を設定することから始まる。だが、これが書けない学生が多いことに驚いた。現時点で目標が見い出せていない人は仮置きでもいいと言っても書けない。その内、「先生、書けません」と半べそ状態の学生が出る始末である。衝撃的であり心底驚いた。無限の可能性を秘める若者が、自分の将来の夢や目標が持てない。これほど不幸なことはない。

筆者は、良き両親の影響もあり、幼き頃から「戦闘機パイロット」になるという夢を持ち、まっしぐらに夢実現に邁進してきた。幸いにも夢を実現でき、国家防衛に貢献できた。これを誇りに思い、達成感

を感じている。だからこそ、自分の夢を持てない若者が哀れでならない。

これは決して個人の問題ではない。日本社会全体が基軸や方向性を失い、「公」を喪失した戦後教育と相まって、国家や社会のあり方と自分の生き方が繋がらなくなってしまった。その結果、働くことに意義を見い出せず、一体何のために生きているのか分からなくなる。人間、金儲けだけでは生きていけない。

一流大学を卒業しても、自らの人生を選ぶことができず、茫然自失する。これを「たたずみ君」と言うらしい。この「たたずみ君」が増えているという。「青少年を見れば、その国の未来が見える」と言われる。由々しき事態である。

歴史家アーノルド・トインビーはこう言う。「我々は常に、自らの内にある『虚ろなもの』によって亡ぶ」と。日々の生活には、なんら不自由はない。だが夢が持てない、生き甲斐が見い出せない。ただ生きているだけ。そんな「虚ろなもの」によって多くの若者が苦しめられている。この原因是、戦後の「公の喪失」という社会風潮であり、これを生んだ戦後教育にある。戦後日本社会は、一貫して「公」より「私」を優先してきた。小学校から大学まで「個」や「自己」実現の価値観は教えたが、「公」に尽くす価値観にはあえて背を向けてきた。

人間には本能的な三つの願望があるという。①善い人間になりたい ②善い仕事をしたい ③人々を幸福にしたい の三つである。この願望は「個」と「公」が繋がることによってはじめて成就する。日本社会全体が「公」という普遍的価値を失った結果、国家・社会へ貢献して本能的願望を充足するという機会を失った。その結果、夢も希望も失い、自分が何のために生きているのか分からなくなってしまった。

「公」に尽くすという普遍的、根源的価値は空気のようなものである。戦中派世代までは当たり前だった。だが、「私」を最優先する戦後教育で育った若者には最早理解が難しい。当たり前のものが欠けると、言わば酸欠状態になる。酸欠に陥った日本の若者は、あえぎ苦しむか、

無力感で「たたずむ」かのどちらかだ。

「公」の喪失は、皮肉にも「公」への依頼心を増幅し、過度の国家依存と無責任体質を生む。年金も払わず、国は老後の面倒をみるべきたと嘯く。ベンツで子供を送り迎えする親が給食費を払わず、「国が払って当然」と言ってのける。また「公」を喪失した結果、自由には責任が、権利には義務が付随するという当たり前の事が理解できなくなつた。

数年前の国際世論調査で、「貴国が侵略されたら戦うか」との設問に對し、日本人が「はい」と答えたのは、13.2%だった。79か国中、断トツのビリである。日本に次いで低いリトニアでさえ、30%を超える。それでいて「国は国民を守るべきだ」と主張する。自由を謳歌し、自己の権利は最大限に要求しながら、国を守るという国民の義務と責任は回避する。国家は「打ち出の小槌」、「ゆすりたかり」の対象となり下がつた。何かある度に、「国は…してくれない」と「くれない族」が跋扈する。こんな国が長続きするとは思えない。

果たして日本は、この衰亡の危機から脱することは可能なのだろうか。トインビーはこうも言う。「いかなる国家も衰退するが、その要因は決して不可逆なものではなく、意識をすれば回復させられる。国家衰退の決定的要因は自己決定能力の欠如だ」と。昨今の我が国の政治情勢をみると、政治家に任せっていても見通しは暗く、お寒い限りだ。ならば国民一人一人が覚醒し、日本再生に立ち上がるしかない。筆者は約40年、自衛隊生活を送った。この40年の経験から、日本再生は「自衛隊教育」にヒントがあると思っている。

2011年3月、東日本大震災が発生した。自衛隊は約10万の隊員を投入し、全力で災害派遣任務にあたつた。自衛隊には約24万人の隊員がいる。だが、平時の警戒任務や隊員教育、施設管理、行政事務などを考慮すると、10万人は自衛隊のほぼ全力である。段階的に規模は縮小したもの、延べ約1090万人の隊員が2年間余り、歯を食いしばって頑張つた。

隊員達は、自分のことは後回しにし、被災者優先で黙々と任務に専念した。自分の家も被災したにもかかわらず、真っ先に現場に駆け付け、災害救助活動にあたった。温かい食事は被災者に配り、自らは冷えた缶詰で我慢した。仮設の野戦風呂を現地に設置したが、入浴するのは被災者であり、自らはペーパータオルで体を拭くだけだった。御遺体を発見した時は、自分の親戚のように丁寧に扱い、そして涙した。

こういった「私」より「公」を優先する真摯な隊員の姿は、国民には新鮮に映ったのだろう。自衛隊的好感度は上った。これまで反自衛隊だったメディアも自衛隊の生の姿を伝えざるを得なくなった。その映像に多くの国民は感動した。「いざという時はやはり自衛隊だ」「国の屋台骨は自衛隊だ」という声が澎湃として沸き上がる。自衛隊創設以来、初めての現象だった。

イラク派遣の時もそうだ。2003年末から自衛隊はイラク人道復興支援任務に従事した。酷暑、砂嵐など劣悪な環境下、しかもテロの脅威がある中で、黙々と給水支援、医療活動など人道復興支援に邁進した。この自衛官の姿は国内外で好印象で受け入れられた。

陸自派遣部隊が約2年半の任務を終えて帰国した後も、空自部隊は残って航空輸送任務を継続した。筆者は陸自撤収後の2年8ヶ月、イラク派遣航空部隊指揮官を務めた。陸自撤収後は、国内ではイラク派遣自体が忘れ去られた。だが、空自隊員は現地で黙々と任務に汗した。

酷暑、砂嵐、テロの脅威などの厳しい任務環境は様々な困難に直面した。空港周辺ではテロリストによる銃撃や携行ミサイル攻撃の危険があり、地上ではロケット弾攻撃が頻発した。特にバグダッド空港での離着陸は毎回、神経をすり減らした。延べ約4000人の空自隊員が5年にわたって任務を遂行したが、この間、事故もなく、不祥事は一件もなかった。

多国籍空軍による航空輸送任務のため、空自は諸外国空軍と全く同じ条件で同じ任務を遂行した。自ずと空自の実物像が諸外国空軍と比較される。5年間に及ぶ輸送実績、輸送機の稼働率、安全性、隊員の技

量や士気など、全てにわたって空自は群を抜き、諸外国軍の高い評価を受けた。

筆者が撤収前に現地を訪れた際のエピソードがある。諸外国の将官達が主催してくれた昼食会で筆者にスピーチの機会が与えられた。5年間に及ぶ諸外国軍の支援に感謝を述べると共に、空自の特殊性として軍法及び軍法会議がないことに触れた。その時である。諸外国の将官達は表情が一変し、驚き、矢継ぎ早に質問が飛んできた。「軍法会議がないのに、どうやって規律を保つのか」「脱走兵が出ないのはなぜか」「高い士気を維持する秘訣は」等々。予期せぬ反響の大きさに筆者の方がむしろ驚いた。咄嗟に”Samurai Spirit”と述べてその場を切り抜けた。空自隊員は規律厳正、礼儀正しく、使命感旺盛で操縦技術にも優れ、何より誠実に任務をこなすと諸外国軍から高い評価を得ていた。筆者はイラク派遣を通じ、これまでの自衛隊教育は間違っていたと確信した。

自衛隊は特別な若者が入隊して来ると誤解している人が多い。自衛隊は日本社会の縮図であり、平均的な若者が入ってくる。挙措容儀はだらしなく、礼儀は知らず、言葉遣いは乱れ、挨拶もろくにできない。こういった若者達も、入隊数ヶ月で見違えるような自衛官に変身する。教育隊の卒業式では、親が子供の変身ぶりに涙を流す。

自衛隊はどのような教育をしているのかという質問をよく受ける。筆者は「戦後教育の否定です」と応えることにしている。戦後教育は、国家を悪、敵対する存在として位置付け、国家や権威を否定して「個」や「私」を最優先した。最近まで教育現場で国旗、国歌を否定してきた。この真逆を教育するわけだ。

筆者が米国に留学した際、4歳の息子を現地の幼稚園に入園させた。彼が最初に覚えた英語は、国家に忠誠を誓うフレーズだった。毎朝、国旗掲揚があり、その際、星条旗を前に胸に手を当てて国家への忠誠を誓う。諸外国では至極当たり前の光景だが、日本では先ず見られない。海外生活を一度でも経験した人は、日本の教育現場の異常に気が

が付く。

日本にあって、自衛隊はこの国際スタンダードを実践している唯一の組織かもしれない。毎朝夕、国歌が流れ国旗掲揚、国旗降下が行われる。その際は、いかなる状況にあっても、隊員はその場に立ち止まり国旗に正対して敬意を払う。また入隊時には宣誓をするが、自衛隊ならではの「事に臨んでは危険を顧みず・・・」というフレーズを声高らかに宣べる。「個」や「私」を優先する戦後教育から、「公」を最優先する価値観への転換を図る。人間は誰しも人の為、国家・社会の為に尽くすことを喜びとするDNAを持つている。これを発芽させないように抑圧してきたのが戦後教育である。自衛隊では若者をこの呪縛から解放させるのだ。

日々の訓練や警戒監視、災害派遣などを通じて、公に尽くす、人に尽くす喜びを体得させる。国家に尽くす生甲斐を実感すると、若者の眼の輝きは一変する。古代ローマの哲学者マルクス・トゥッリウス・キケロは、「あらゆる人間愛の中でも、最も重要で最も大きな喜びを与えてくれるのは祖国に対する愛である」と述べている。また新約聖書にも「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」とある。この人類普遍の価値観から目を背け、「個」や「私」を至上の価値とし、枝葉末節のみを重視してきたのが戦後教育である。これを真っ向から否定し、国を愛し、社会のため、他人のために我を捨てる生きがいを体感させる。「人は人に生かされ、人は人のために生きる」ことを学び、その喜びを体得した時、若者達は素晴らしい自衛官に変身する。別に特別なことをやるわけではない。日本人が本来有する、優秀なDNAが発芽するようサポートするのが自衛隊教育である。この成果が先述した東日本大震災やイラク派遣で見せた自衛官の実像なのである。

今の日本社会の惨状は戦後教育80年にわたるボディーブローの結果である。このまま放置すれば本当に「爛熟して倒れる」かもしれない。日本再生には自衛隊教育がヒントになると述べた。家庭教育、学

校教育でも「公の復活」を実践させることだ。国家、歴史、伝統、文化を貶め、祖先や先人への敬慕、子弟間の礼節など伝統的価値観に背を向けてきた戦後の風潮を一掃することだ。

米国的小学校では、三つのことを教えていた。①クラスみんなで決めたことは、イヤなことでも一緒にやろう ②町でお巡りさんが困っていたら手伝おう ③両親の言うことと先生の言うことが違っていたら、両親の言うことを聞くように。

幼き頃から、民主主義と「公の優先」を叩きこむ。日本での家庭教育や学校教育でも大いに参考になる。「皆の為に我慢する」「皆に迷惑をかけない」、“One for all, All for one”（一人は皆の為に、皆は一人の為に）、あるいは ”Service Before Self”（自分のことより奉仕を優先）の精神などを徹底して刷り込む。「公」のために「自我」を捨てる。自衛隊教育に通じることが多い。日本の家庭教育、学校教育はこういう教育を大いに参考にすべきだ。

物心がついてくるころには、学校教育で公園の清掃や海岸のゴミ拾いなどの社会奉仕活動を義務付けることも考えるべきだ。高学年になれば、自衛隊、警察、消防、海上保安庁などの現場で職業体験させるのも前向きに検討すべきだろう。介護の現場でボランティア活動をさせることも積極的に取り入れるべきだ。何より国家・社会に尽力した先人の歴史を学ぶことは必須である。

国家が一人一人の国民の努力で成り立っていることを学ばせる。人の為、社会の為、国家の為に奉仕することに生きがいに感じ、それが自己実現となるよう仕向ける。「国の運命を我がことのように思う人、これが本来の市民」と塩野七生氏は「ローマ人の物語」で述べている。国家・社会を背負っているという当事者意識を植え付けることが学校教育、そして家庭教育で求められる。それはまた、国の抑止力強化、国防力強化にも直結する。第3代米国大統領トマス・ジェファーソンは言う。「最大の国防は良く教育された市民である」と。

「爛熟して倒れつつある」日本を立て直すには、現在の学校教育、

家庭教育を立て直すしかない。一人一人の覚醒なく日本再生はありえない。「立国は公に非ず、私なり。独力の氣力なき者は國を思うこと深切ならず。愚民の上に苛き政府あり」(福沢諭吉) なのである。一人一人の心の中に「公」を復活させることだ。それは既に成果を出している自衛隊教育に範が隠されている。教育は迂遠のようだが日本再生の一番の近道なのである。